

小林勝作品集
2

小林勝作品集——第2卷 ©1975

一九七五年八月二五日印刷 一九七五年九月五日発行

著者——小林勝

裝本——駒井佑二

発行者——臼井浩義

印刷所——大進印刷株式会社

製本所——中村製本株式会社

*

発行所——株式会社 白川書院

東京出版部——東京都新宿区左門町三ノ四 電話 三三三—三三三 二六〇 振替東京 六四四〇
本社——京都市左京区北白川追分町八七 電話 七五五—六二六〇 二六〇 振替京都 九三
0393—7556—3114

小林勝作品集

— 第2卷 —

編集委員

野間

長谷川

菅原

中野

四

克

重

宏

郎

己

治

第2卷——目次

断層地帯

解題	解説
藤井	愛沢
徹	革
479	461

断層地帯

男は黙ってすうっとはいって来て、皆に挨拶することもなく畳の上へ坐っただけである。その時から部屋の空気が一変した。

男を案内して来た地区委員の西村は、男が畳の上へじかに腰をおろしたのを見て、あわてて言った。

「岡君、岡君、何をしてるんだ。布団だよ、座布団を持つてくるんだよ」

北原の隣に坐っていた岡は、男がはいってくるまで、盛んに駄洒落をとばして人を笑わせていたことを忘れ果てたように体を固くしていたが、西村に言われると、あわてて自分の尻の下から座布団をひきずり出した。彼は膝でずり寄って行って座布団を男の前へ置いた。

「どうぞ、これを」

男は艶のない灰色の長い顔を岡の方へむけて、いや、と一言いっただけだった。

「いえ、もう、本当に私はいいんですから」

岡はかすれた声でつぶけた。

「本当にいいんです。私たちは若いんですから」

男は軽くうなずいて座布団をうけとった。そういう風に扱われつつている、物なれたしぐさだった。彼は左手

をのばして腕時計をちらとのぞきこんだ。右手を内ポケットにいれると何か探していたが、ななめ後ろの電灯の明りの十分にとどいていない部屋の隅をふりかえった。その薄暗がりにむかつて、ほとんど抑揚のない低い声で言った。

「あれを、君、持ってる、な……」

たどたどしい、どもりに似た発音だった。日常の生活で人々が何気なくかわす、気軽な、言った方も聞いた方もすぐ忘れてしまう、そのような会話とは無縁の、何か一つの仕事以外には決して喋られることはないといった言い方だった。甘さの微塵もないその声が北原の薄い腹の皮を震わせた。そこに鳥肌が立つ感じだった。たしかにこれは遊びごとではない。

薄暗がりの中で、それよりも濃い一つの影がかすかに動き、軽い、しかも硬い紙が鳴る音が聞えた。それから、電灯の明りの中へ、筋張った大きな手がつき出された。その手の中に、白い小さな紙片があった。ごつごつした手に似つかわしくない、細い、ほとんど神経質な声で聞こえた。

「これです」

男は手をのばしてその紙を受け取った。懐中からゆくりと眼鏡をとり出し、紙片を暗い電灯にかざすようにする。それきり部屋の中は静かになった。ごくつと唾を

のみこむ音が聞えた。

それにしても、あいつは、あの部屋の隅にいる奴は何だか妙な男だ、と北原は思う。おれはあの男が部屋の中へはいってきていたのを知らなかった。何時からあそこに坐っていたのか。あの男は多分、護衛なのだ。人事防衛部の男だろう。あんな隅に何時のまにかひっそり坐っていて、まるで、影だ。

男は黙って、紙片を読みつづけている。青年たちが息をのんで彼を見守っていることなどまるきり無視しているポーズをとっている。その紙片に何が書き込まれてあるのか。北原は男の顔、男の姿の上に眼をこらす。

男は五十歳を越えていると見えた。だが、それはあてにならない。党の中には、治安維持法その他による、拷問や永い間の拘置生活で、年齢以上にふけこんだ顔をしている男や女がいるのだから。男の顔は長く、艶がない。その顔色は日本人ばなれした、くすんだ灰色で、うつすらとしみがある。太い眉の下に、ナイフで切りこんだような鋭い細い眼があり、それが時々きらつと光る。硬い光である。唇はほとんど顔の肌と変わらない色で、ただ少しばかり、紫がかっている。この顔は十年近い監獄の生活と、ひどい拷問を耐えてきた顔だと北原は思う。余り拷問がひどかったので、病気になる、発音を正確に出せなくなった男、十年近く独房の中で壁をにらん

できた男、——男の顔は日本人なら誰でも持っている、あの温い光を吸った土の色や萌え出す雑木の芽の色をすっかり失って、壁とコンクリートの塀の色に同化してしまつた。男の顔は、建てられて以来、火の熱というものを決して知らない冷えきつた壁だ。男の眼は明るい夏の陽の光には耐えられないが、しかし暗闇の中では何ものも見逃すことなく鋭く光る眼だ。それは、悪を、黒いものを、虚しいものを見逃しはしない。それは容赦なくあばきたてる。男を見ていると、党歴も浅く、弾圧を直接肉体にうけた経験もたない北原は次第に息苦しさを覚えてくる。自分など想像もつかない生活を送ってきた男、北原の胸に恐怖に似た気持がつきあがる。男をじつと見ていると、北原の体と心の中の柔らかない部分が、段々とおしつけられ、充血し、ふるえだすような気がする。

その時、男がそつと紙片を膝の上に置いた。北原たち六人の顔をぐるっと見廻した。男は口をあけた。その歯の欠けた黒い穴から、とぎれながらききとりにくい言葉が押し出された。

「君たち、武器、は、どこにある」

ゆっくりと、低い声で男が言つた。

誰もが不意をつかれた。そんな質問がいきなり出てくるとは誰も思わなかった。大体が、今夜はじめてこの地域の軍事行動隊結成の会議に集まつたばかりである。な

るほど、西村地区委員に指示された通り幾篇かの軍事方針に関する論文は読んでいたし、今夜も持って来ている。しかし、いきなり、武器は何処だ、というような質問がとんでくるとは思わなかった。言ってみれば、剣道について理論的に教えられたり、下手くそ同士がところかまわず竹刀で叩きあつたりしているところへ、突然、真剣がつきつけられたという感じである。しかしすべてが、単なるお話ではなく、現実そのものである証拠には、その質問を發した男は、冗談めいた笑いなどどこにも浮べていない。恐ろしいほどまじめである。色艶の悪い唇を曲げるように結んだまま、じつと皆の顔を見ているのだ。

一人一人を説いて、ようやくこの会合を開いた責任者である地区委員の西村が、じれったい眼つきで見廻した。何か言いたいように唇をもそもそ動かす。正面に坐っている男が西村の顔を見た。西村が如何にも具合悪そうに膝を動かし、汗も出ていないのに額をなでた。六人の青年が事の重大さによりやく気付いて気をのまれたような顔をしているのが、まるで自分の責任であるかのやうに恥じている。

「武器は……」

沈黙に耐えきれなくなつて、岡がしわがれた声で言い出した。

「まだ、何もないんです。おれたち、今日はじめて集つたんです」

男が首をかしげた。

「西村君、と言つたね？」

男が西村の方を向いた。

「君は、武装行動に関する学習の指導をどれくらいやったのか」

西村の顔がみるみる赤くなつた。

「まだまとまつたことは何もやっていないんです」

男はしばらくの間眼を伏せて、じつと何かを考えている様子だつた。それから正面をむいて、皆の前へぬっこぶしをつき出した。

「わかるか」

男は言つた。

「我々の武器は、これだ」

北原はななかばんやりした顔つきで自分の眼の前につき出されている男の握りこぶしを見ていた。

「武器は、これだ」

男はもう一度言つた。

——まるでこれは禅問答だ、と北原は眼が痛くなるほど男の拳を見つめながら思つた。我々は握り拳で闘う、ということなのか。握り拳でカービン銃に勝つ、ということなのか。この男は、一体どういうつもりで、意表を

つくようなことばかりするのだらう。

男がゆっくりと手をひっこめた。

「諸君は、何かピンとこないようだな」

男は低い声で、ただたどしく言った。

「諸君は、今、朝鮮の人民が、どうやってアメリカ帝国主義者と闘っているか、ということ、或いは、かつて中国人民がどうやって八路军と共にたたかたかを考えてみる必要がある。頭の中だけで考えるのではない。体全体でよく考えてみる必要がある。先月、メーデーの日に人民広場で大衆がどうやって武装警官隊と闘ったか考えなくてはならぬ。他人事ではない。自分自身の問題として取り組まねばならぬ。でないと、我々は情勢にたちおくれしてしまう」

男は膝の上の紙片をとりあげた。

「ここにある事件の詳しい報告がある。これ一つ見ても、情勢は実に、容易ならぬところに来ていることがわかる。諸君には、抽象的なことを喋るよりも、具体的な事実を語った方がよいと思うから読んでみる。じっくり考えてもらいたいのだ。そして、こんな事件は、現在起こっている無数の事件の中のただ一つに過ぎないということを知ってもらいたい」

空気は重苦しく凝み、北原の体はしびれたようにかたかった。

『——最近、以下の事件のほぼ全貌が判明したので報告する。

一九五×年十月、奇妙な事が相次いで起こった。その出来事の原因や正体が全く不明であったので、「奇妙な事」という以外はなかった。

東京、大阪をはじめとして全国各地で、人間が急に姿を消してしまふといった事件が頻々と起こりはじめたのである。ある男は、風呂へ行くといって家を出て行ったが、そのまま戻って来なかった。ある男は、所用で北海道から上京して来て上野駅へついたが、それから先の消息を絶ってしまった。こういう奇怪なことが、九州でも、関西でも、関東でも、東北でも、北海道でも起こったのである。姿を消した人々の数は三十三名に達した。これらの人は一つの共通点をもっていた。それはみな、在日朝鮮人だという点である。

家族をはじめ在日朝鮮民族救済会の組織が全力をあげて調査したにもかかわらず、何一つ事件解決の手がかりはなかった。無論警察へも届けたが、その方からも何一つわからなかった。しかし、三十三人について調べた結果、次の事が判明した。最も多いのは、官憲によって解散せられた旧在日朝鮮人連合会の幹部だった人々である。朝鮮で激烈な戦争が起こっている時でもあり、これら三十三名の謎の失踪には、何か不吉な感じがつきまと

つていた。民族救援会は次のように結論した。——重大な政治的陰謀が極秘裡にすすめられている疑いが濃厚である、と。しかし真相は闇に包まれたままであった。

六カ月、ないし一年後に、突然、在日アメリカ軍による軍事裁判の通知が、行方不明になっていた人々の家族のもとに届いた。こうして、事件はようやくその姿をあらかわしたのである。

三十三名の人々は在日アメリカ軍によって逮捕されていたのである。彼らの前には、米軍当局の内命を受けて、あらかじめCIAが作成した自白調書が置いてあった。その調書には、自分は北朝鮮から特別任務によって日本へ渡ってきたものであるということ、特別な任務とは、在日アメリカ軍の情報をあらゆる手段を用いて収集する仕事であったということ、そしてCIAによれば「そのような反占領軍的スパイ活動のため」の資金として、北朝鮮から阿片、コカイン等を大量に密輸入して売ったということ、また彼らの情報は、北朝鮮が南朝鮮に軍隊を侵入させる場合、在日アメリカ軍が朝鮮へ出兵するかどうか、出兵するとすればどういう計画と編成に基づくものであるかを調査したものであること——等が書かれてあったのである。

このような事実無根の事柄を認めることを、逮捕されていたすべての朝鮮人が拒否した。そこで拷問がはじめ

られた。

拷問にはまず焼火箸が用いられた。焼火箸が、指先に、それから指の股に、腋の下に、背中に押しつけられた。また、別の人間には電流が使用された。導線の一つの極を右手に結びつけ、他の極を左手に結びつけ、電流を体に流した。

別の人間は、身動き出来ないようにさせられたうえで、両腋を無理に押しひろげられ、眼の前約五センチのところ、百ワットから五百ワットの電球をつきつけられた。そのため、ほとんど失明の状態に陥った者もいる。

ある者は椅子に両手両足をしばりつけられたうえ、朝鮮系米人、日系米人、および米人が交代で自白を強要した。昏睡状態になると水をかけ、三十六時間、ぶっとおしでつけられた。また、コーヒーの中に麻薬をいれて飲ませられ昏睡状態で自白調書を作成され拇印をとられた者もいる。

更に別な方法が用いられていた。

お前は北朝鮮スパイであったことをどうしても自白しないから、朝鮮へ送還して銃殺に処すると宣告された者もいる。彼は実際に飛行機で南朝鮮へ送られて投獄されたのである。監房は、四畳半ほどの広さで、その中には南朝鮮で逮捕された南労党党员が三十数名いた。寝ることはおろか、シャがみこむことすら困難であった。つつ立

っていなければならなかった。一週間たつて体力的にもはや耐えきれなくなった時、また日本へ飛行機で連れ戻すという手のこんだやり方で、自白を強要された。

このようにして、アメリカ軍は、朝鮮戦争がはじまる前から既に北鮮スパイ網が日本全土にはりめぐらされており、アメリカ軍の情報をさぐり、朝鮮戦争をあらかじめ準備していたのだという自白調書を作成しようとしたのである。

裁判は一九五〇年四月からはじまり、十二月末日までに三十三人に対して判決が言い渡された。それは懲役三カ月から懲役十年にいたる重労働と罰金一千ドルから五千ドルに及ぶ刑であった。服役は、青森、秋田、仙台、前橋、宇都宮、栃木（女子二名）、浦和、千葉、府中、横浜、久里浜、静岡、岐阜、京都、大阪、岡山、広島、高松の各刑務所である。

このような軍事裁判によってすら有罪の判決を下すことの出来ない人々がいた。そのうち六名の身柄は、米軍当局の手から直ちにCIA及び外国人出入国管理庁に引き渡された。六名は、この裁判ですら無罪になったのに、軍事裁判の資料をもとにして、日本国内から強制退去が命ぜられた。その中の一人は三十歳という若さでありながら歩くことはおろか、這うことも出来なかった。アメリカ軍の拷問による結果、足腰たたぬ不具者になっ

ていたのである。こうして六名の朝鮮人は外部の誰一人が知らないうちに朝鮮へ送還されてしまった。

これら六名は朝鮮に送還された後、更に在朝鮮CIAによる取調べと拷問をうけた。そして銃殺された者一名、二年半の懲役の判決をうけて大邱刑務所に投獄された者一名、あとの四名は消息不明となっている。

その直後、軍事裁判で無罪になったがまだ拘留されていた一人が、また秘密裡に送還されようとしているという情報が民族救援会にはいった。この時六名の人々の強制送還とその後の事実をつかんでいた民族救援会は、その情報を受けて、全組織をあげて抗議運動を起こした。毎日のように出入国管理庁へ押しかける一方、海外へもアピールを発した。この執拗な抗議によって、出入国管理庁では「そういう事実はない」と言わざるを得なくなり、送還は一時、中止されたのである。

事件はこれによって終わったものではなかった。本年四月二十八日、サンフランシスコ講和条約が発効した。同時に、その日をもって、アメリカ軍を中心とした連合国軍隊の軍事占領は終結した、と宣言された。

軍事裁判によって裁かれ、各地の刑務所で服役中の朝鮮人たちは表向きは全員釈放された。が、そのうち十七名は釈放令状と共に再逮捕令状「密入国容疑」によって逮捕されたのである。

抗議運動によって五月の終わりまでに八名が釈放され二名が保釈になった。しかし、別に三人が突然朝鮮へ強制送還され、重大な政治犯として李政府によって銃殺されたのである。そして残りの四名には三度目の逮捕令状が出された。容疑は「関税法違反、外国人登録令違反」である。この四名は、何時ぬきうちの的に強制送還されるかわからないのである。』

男は読むのをやめた。その時はじめて、北原は自分の肩や首や腕が、固くこわばっているのに気付いた。自分の住んでいる世界がいやおうなく黒々とした色彩で塗りつぶされていくのを感じていた。のびきならぬ一つの世界の前へひきすえられた思いである。武装行動隊に関する論文といい、今夜のこの集まりといい、もう北原にとっては他人事ではなくなっている。その中へ真一文字につき進んで行こうとしているただけしいたかぶりと同時に、北原は、そうした殺伐な権力と武力との激突する世界とかかわりのない世界へゆめくような哀惜を感じていた。

「さっきも言った通り、これは、今の日本を覆っている氷山の、ほんの一部にすぎないのだ」

男が言った。

「人民が人民自らの権利を守るための闘争形態を、わが党は明確にさししめし、まず実践しなくてはならない時

だ。諸君は、そのために、ここに集まっている。わたしは、今はこれくらいにしておく」

男は時計をのぞいた。

「わたしはまだ少し時間があるが……西村君、学習をはじめはどうかね」

はあ、と途方もなく癩高い声で西村が言った。彼は男を前にして、明らかに興奮していた。

『植物学』二十一号、みんな持って来たな。そう、去年の十一月のもの。岡、読んでみろ」

岡も興奮していた。彼はつかえながら読んだ。

「問、われわれに何故軍事組織が必要か。答、武装した権力を相手に闘っているからである。日本国民の利益を守って、国民を現在の奴隷状態から救い、民族解放、民主革命を闘いとるためには、アメリカ帝国主義者の日本に対する占領制度を除かねばならない……」

……売国的な吉田政府は、アメリカ帝国主義者の野望に同意し、占領制度を延長するための日米安全保障条約を結び、警察や予備隊、海上保安庁等の新しい軍隊を強めている……」

男が、ちょっと、と言った。

「わたしは行かねばならんが、その前にひとこと。理論的によく学ぶということをおこたって、何でもやればいいんだ式の間違いをおかさなために言うておく。最

近、党内に、この問題に関して、日和見主義や、統一戦線のための闘争という全体を忘れて部分的な勝利をかちとろうというストライキマン的な傾向や、一揆主義があらわれているけれども、これはマルクス・レーニン・スターリン主義を学ぶということを怠るところから出ている。それで、わたしは、『植物学』だけでなく、古典的な文献も十分学んでくれるよう希望する」

それから男は筆記するように、と言ったと思うと、半分眼を閉じて、つづけざまに言った。

「レーニン『国家と革命』の第四章、国家の死滅と暴力革命、のところ。O書店から出ているマルクス・エンゲルス選集第十四巻『反デュリング論』第二、第三、第四章。G書店版『マルクス・エンゲルス・レーニン・スターリン遊撃戦論』。毛沢東の『井岡山闘争』『日本帝国主義に反対する戦術について』それから『抗日の時期における中国共産党の任務』……まあ、こういったところを、手はじめに読んでもらいたい」

男はそう言い終わると、入って来た時と同じように、すっと立ちあがり、部屋を出て行った。部屋の隅にいた男が、影のように後に従った。玄関の戸が開いて、そしてしる音がした。ゆっくりと二つの足音が消えていくのを部屋の中の男たちは身じろぎもせず聞いていたが、その足音が完全に消えてしまうと、誰ともなく、う

めくような溜息をもらし、足をなげ出した。

「おっどろきやしたね」

とんきょうな声で岡が言った。北原は思わず笑ったが、その笑いは、心の底をうちひらいた笑いではなかった。これは遊びごとではない、と彼は思った。彼は自分の笑いが、かわいた糊のように顔にはりつき、自分の顔を奇妙にこわばらせるのを感じた。

「すごい男だな」

一人の男が言った。

「すげえや、全く。だけでもよう……」

岡が首をすくめるようにして言った。

「なんだかおっかない人じゃないか。あんな風にして、一日二十四時間を過ごしているのかねえ。西村さん、あの人は一体誰なの？」西村は煙草を吸っていたが、はき出した白い煙の向う側で顔をしかめた。

「そんなことはお前が聞く必要はないぜ」

西村は荒っぽく言った。岡が頭をかいた。

「わかったよ、わかりましたよ。だけど、あなたがそんなに強く言わなかった方がいいじゃないですかねえ」

「お前は口が多過ぎるよ。口の多い奴ほど、いざという時に逃げ出すんだ」

「へえ、おっしゃいましたね」

岡はむっとしたように言った。

「それでも、わたしは労働者ですよ。れっきとしたプロレタリアートですよ」

北原は隣にすわって、口をつき出し上気している岡の顔を見た。岡の顔は頬骨が飛び出し、肉がそげ落ちている。顔の線は細く、どことなくもろさを感じさせた。唇がぬれたように赤く、口数の多い人間にふさわしく、いかにも薄っぺらでゴムのようである。唇の端がゆるんで、白い泡がたまっている。

——もちろん、おれは労働者の顔というものを、よくあるように類型化して考えようとは思っていない、と北原は思った。いかにも精悍で、黒光りした肌、強い意志をぐっとくわえこんでひきしめられた唇、鍛えぬかれた知性をしめす広い額、どんな困難をも噛みくだくように見える頑丈な顎、そういういわゆる典型的な絵の中の労働者なんて信じない。しかし、この男は……

北原には、彼の感覚の最も深いところで、この男を信じられないものを感じたのだ。岡の印象が、弱々しくいかにも繊細だというのは顔かたちのことを言っているのではなかった。岡が細い眼をひきむくようにして、興奮しながら、れっきとしたプロレタリアートですよ、と高い声で言った時、その唇の端に浮かんだ白い泡を見ながら、彼の言葉とは正反対のものを北原は嗅ぎとったのだ。

「今日はもう遅いからあまり時間はとれないけど、今まで読んで来た論文ね、その中で疑問点があったら質問なり討論なりすることにしよう」

西村が言った。皆が思い出したように、持参した出版物をばらばらめくって、黙りこんでしまった。

北原には一つの疑問があった。今、其処に集まっているのはみな二十三、四歳の青年たちである。してみると、男たちは戦争中は十六、七歳であったはずだ。つまり、陸軍士官学校とか海軍飛行予科練習生というものに志願していたのでないかぎり、軍服をその身にまとったことがないということになる。だが、北原は戦争中、士官学校の生徒だった。彼は無論、軍事技術を学んだ。彼を約二年にわたって指導したのは、士官学校出身の大尉と、そして野戦をたたかいぬいてきたばりばりの現役の曹長である。北原は戦闘のための基礎的な戦術を学び、小銃、軽機関銃、重機関銃を操作し自由に分解組立が出来た。実弾の射撃もやり、敗戦間際には敵機に対して対空射撃もやっている。

北原は武器というものが一体いかなるものかを知っていた。士官学校へ入校した時、はじめて彼のものとして与えられた小銃のずっしりした重みを両方の掌に感じた時、彼は自分の少年時代がみるみる後方へ去って行き、色あせ、形が次第にぼやけて行ったという、あの不思議